

唯識説における Buddha-vacanatva について —— 『秘義分別撰疏』の考察 (5) ——

千葉公慈

On the Buddha-vacanatva in Vijñaptimātratā-vādin —— A Study about *Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā* (5) ——

Koji CHIBA

1. 問題の所在

本稿が考察の対象として扱うのは、『秘義分別撰疏』(Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā*¹、以下 VGPV と略称)である。VGPV は成立年代が不詳と伝えられ、現在でもサンスクリット訳、漢訳ともに存在せず、ただチベット語訳のみが一部に現存するテキストである。著者についてチベットの伝承によれば、ヴァスバンドウ(Vasubandhu 世親^{せしん}、天親^{てんじん}、約320—400年?)と一応されているのであるが、実際に本文を検討したところでは先行業績*²も指摘するようにその可能性は低く、かなり後代の成立と判定せざるを得ない。一部には中国成立説とも指摘されているが*³、いずれにせよ VGPV はインドの瑜

伽行唯識学派の思想的集大成ともいうべき『撰大乘論』(Mahāyāna-saṃgraha、以下 MS と略称)に対する重要な注釈書であり、唯識学派におけるアーヤ識設定の隠された意味とその思想を開示せしめる貴重な手がかりでもある。したがって VGPV として伝えられる僅かな資料の中でも、チベット訳デルゲ版(No. 4052)を底本として選択し、完訳を目指してすでに継続的に現代語訳*⁴を4度にわたり試みたわけであるが、これらの試訳によって将来的には MS に対する側面的理解の一助としたいと考えている。特に唯識思想における真如観を一貫したキーワードとしつつ、MS 成立後の唯識学派における思想的背景を遡行することによって、同派の掲

* 1 Don gsang ba rnam par phye ba bsdus te bshad pa (Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā)
: Vivṛtti- in Derge ed. but Vivṛta- in Peking ed.

* 2 高田仁覚「撰大乘論に於ける阿羅耶識設定の密意」『密教文化』、Vol. 21, 1953, pp. 17-36
同 「阿毘達磨大乘経について」『密教文化』第26号1954, pp. 20-37、(部分訳あり)
天野宏英「秘義分別撰疏の著作問題」『宗教研究』No. 150, 1956, p. 1
同 「チベット所伝の唯識思想について」『文化』Vol. 21, No. 6, 1957, pp. 87-99
袴谷憲昭「Mahāyāna-saṃgraha における心意識説」『東洋文化研究所紀要』第76号、PP. 281-296(部分訳あり)、ちなみに同論文 P. 282にて VGPV の著者問題が論じられている。氏によれば Ye ses sde とかなり接近した年次の訳者が関与しているのでは、と推測されている。

* 3 大竹晋「Vivṛtaguhyārthapiṇḍavyākhyā の引用文献」『東方學』(東方學會)第百六輯所収。

げる様々な術語概念をめぐり如何にその整合性を保たんと解釈せしめるのか、教理上の伝統性と自派の主張との矛盾に揺れ動く言語の密意の問題に焦点を当てることによって、以下の試訳とともに若干の問題点を提示するものである。

2. 定学重視の三学解釈

前回の拙論にしたがえば、MS 第6章にて言及された三学の学修において、増上戒学がそのまま六波羅蜜として説かれている所以を「大乘の根本的立場」として撰衆生戒 (sāttvarthakriyā-sīla) を説示することによって解説し、戒学そのものを精神性重視の立場から再解釈せしめるものであった。それはまた同時に、増上心学そのものを理解する必然的な前提でもあり、続く第7章においてその増上心学 (adhicitta) をめぐり、citta を重視する見地から体験的な深まりを重層的に考察する禅定が開陳されていたのである。こうしたMSの論述の流れを受けて、第8章では増上慧学 (adhiprajñā) を根本無分別智 (maula-nirvikalpa-jñāna) と定義するに至るのである。

以上の総括として、VGPV では用例の比較的少ない四種涅槃が①有余涅槃、②無余涅槃 (般涅槃、円寂、完全涅槃)、③自性涅槃 (自性清浄

涅槃)、④無住处涅槃として示され、次のMS本文の偈頌を引用しつつ、衆生救済の慈悲活動に挺身する状態の無住处涅槃だけが重要であると説くのである。

MSA : IX 「菩提品」 第56偈。

tham cad chos kyi de bzhin nyid / sgrip
gnyis dag pa'i mtshan nyid de /
dngos po shes pa de la dmigs / mi zad
dbang gi mtshan nyid do //

Nep ed, No. 3522.144b, Der ed, No. 4034. 134a (訳)一切法の真如は二障から清浄であることを特質とし、事物の智慧とそれを対象とする〔智慧とにおける〕無尽なる自在を特質とする。

すなわち煩惱障と所知障の二者を離れることが真如に他ならないというVGPVの立場が確認され、ただ無住处涅槃のみが大乘に独自の存在であると主張するのである。これらMS第9章の主題は、次章の三身説の解釈においては明確にその唯識派の特徴として示される。

kun*⁵ zhes bya ba'i sgra yang rten du grags
te. lus kyi dbang po bzhin te. bsags pa nyid
yin yang mig la sog*⁶ pa'i rten yin pa'i [Der
ed. 300-b-1] phyir ro. rnam pa gcig tu na sku

* 4 拙論『『秘義分別撰疏』覚え書(1)』駒沢女子大学研究紀要・第8号所収、pp. 209-216、
同『『秘義分別撰疏』覚え書(2)』日本文化研究 (駒沢女子大学日本文化研究所)・第4号所収、
pp. 117-131、
同「如来の所分別についての一考察—『秘義分別撰疏』覚え書(3)』駒沢女子大学研究紀要・
第9号所収、pp. 199-210、
同『『秘義分別撰疏』における真如観について』平成15年度日本印度学仏教学会第54回学術大会
(佛教大学)、2003. 9. 6、『印度学仏教学研究』第52巻所収。pp. 373-376
同「所分別と三昧についての一考察—『秘義分別撰疏』覚え書(4)』駒沢女子短期大学研究紀
要・第37号所収、pp. 79-85

* 5 "sku" in Pek ed.

ni rang gi mtshan nyid kho na yin la rang gi
mtsán nyid yin pa'i phyir chos so. 'di ni sku
yang yin la chos kyang yin pas chos kyi sku
ste. de yang de zhin nyid yong su dag pa yin
no.

(Der. ed No. 4052, 300-a-7~300-b-1)

(訳) [MS 本文の第10章、第7節および第9節
に]「一切 (kun, sarva)」と言われる語もまた、
拠り所として一般に認められるのであって、[例
えば] 身根の如きであり、積集されたものでは
あるのも眼等 (眼識等の六識) の拠り所だからで
ある*7。またある観点によれば*8、身とは個別相
(自相) そのものであるが、個別相を有するも
のであるか故に、法[たり得る]である*9。これ
は身でもあるが、法でもあることによって法身
であり、すなわちそれはまた、「清浄なる真如」
なのである。

以上のように「個別相 (自相) を有するもの」
という見解は、法が「性質」ではなく、「性質を
有するもの」という隠された意味になっている
ことに注意しなければならない。法そのもの
(dharma)ではなく、あくまでも法の背後にあ
る基盤 (dharmin) であり、複数の法でもなく、
それらを包括する唯一絶対の単数体、法性が法
身であると示される。

一方、こうした背後にある密意にこそ真の仏
語性 (Buddha-vacanatva) が認められるとする

法の重層的解釈によって、唯識説の非仏説論に
対する反論に関して、逆に声聞乗こそが非仏説
であるという立場によって、すなわち「十種の
説示 (daśa-sthāna)」という観点から説明する
のであるが、その根拠こそがかの重層性に求め
られているのである。

gang gi phyir nyan thos kyi theg pa las ni shes
bya'i gnas la sogs pa yongs su ma rdzogs par
bstan la 'di las ni shes bya'i gnas la sogs pa
rnam pa thams cad stan pa de'i phyir nyan
thos kyi theg pa las khyad par du bya ba
rnam pa bcus de bzhin gshegs pa'i gsung
khyad par du spog pa yin no. mchag nyid kyi
phyir yang khyad par du 'phags so.

(Der. ed No. 4052, 301-a-1~2)

(訳) 何故に「声聞乗より [勝れているのか]」
とは、[声聞乗においては]「知られるべきもの
の拠り所 (=ālaya-vijñāna)」等々が [まだ] 完
全には示されてはおられないが、その一方で大
乗では、[MS 本文第1章以下の]「知られるべき
ものの拠り所」等*10 といった、あらゆるすべ
てのあり方が [完全に] 示されている [のである。]
そのために、[MS 序文3末に]「声聞乗より勝
れているものであると為した」と [主張したの]
は、十種の殊勝なることによって、如来のお言
葉である殊勝なるものに近づける [という意味
な] のである。

*6 "sogs" in Pek ed.

*7 自性身…眼根等の所依 (rten, āśraya, niśraya)、受用身…眼識等の能依 (brten, āśrita, niśrita)

*8 長尾雅人『撰大乘論』和訳と注解・下巻、(講談社、以下「長尾本」と略す) 第9章の解説によ
れば、ある観点とはMSA Xや『仏地経論』を指す。

*9 「個別相 (自相) を有するもの」という見解は、法が「性質」ではなく、「性質を有するもの」
という意味になっていることに要注意。

*10 大乘になって初めてアーラヤ識説や三性説などが設定されたこと。

こうした主張の正当性については、「所化の能力」という典拠を敢えて声聞乗の文献から説示することによって反論を斥けるのであった*11。そこで次項では、唯識派の主張する Buddha-vacanatva、すなわち仏語性という仏説の本質論について、citta の様相が展開される仏典を提示しているという VGPV の相当箇所を概観することにしたい。

3. VGPV 試訳

凡 例

1) 試訳の底本は以下のデルゲ版を使用し、補足的に必要なに応じて北京版を利用した。

Der. ed., No.4052, Ri, 296-b-1~361-a-7
: Tibetan Tripitaka, bstan 'gyur,
preserved at the Faculty of Letters,
University of Tokyo, SENMS
TSAM Vol.12, 通帙第236(Ri)
Pek. ed., No.5553, Li, 356-b-7~434-a-8

2) 固有名詞ならびに通常音写語として用い

られる術語は、カタカナ表記とする。

- 3) 本書のテキスト MS 中にて言及されている部分は、「 」によって示した。
- 4) 重要な術語は、() によってチベット訳を示した。また未確認ではあるが、おそらく誤りではなからうと思われる還元 of サンスクリット語についても、正確な文脈を把握するため、同様に () によって示した。
- 5) 原文にはないが、補った方が理解に便と思われる言葉は [] によって示した。
- 6) 典籍一般は、『 』によって示した。
- 7) なるべく原文に忠実な直訳を試み、日本語として不自然な文章箇所も [] によって整え、敢えてそのままの表現を残した。

[from Der. ed, No. 4052, Ri, 301-a-4, Pek. ed, No. 5553, Li, 363-a-2]

【1. 大乘仏典編纂の意図】

[大乘の仏典では、菩薩を主題として虚妄分別された一切の様相を否定するため、最上なるもの(上品)であるかの『般若波羅蜜多經』が8種類示された。すなわちその] 8種類とは、①

*11 (1) dper na so so'i skye bo yin pa'i phyir tshong pa ga gon dang mdzes ldan dag gi ched du ni dman pa bstan (2) 'phags pa'i skabs yin pas lnga sde'i dbang du mdzad nas ni 'bring (3) byang chub sems rnam ky'i dbang du mdzad nas ni shes rab ky'i pha rol tu phyin pa rnam pa brgyad bstan te. brtags pa'i rnam pa dgag pa'i sgo nas mchog go. (Der. ed No. 4052, 301-a-3~4)

(訳) 例えば凡夫であるが故に、タブッサ (Tapussa) とバドラカ (Bhadra, Bhallika) のためには劣ったもの(下品)が説示されたのであり、聖なるものの段階であることに関して、5つのニカーヤを主題となし給うて中位のもの(中品) [が説示され]、菩薩たちを主題となし給うて『般若波羅蜜多 [經]』が8種類示され、[虚妄に] 分別されたあらゆる様相を否定する (dgag pa) という観点から、最上なるもの(上品)なのである。

『三百頌般若經 (Triśatikā-prajñāpāramitā)』*12②『五百頌般若經』*13③『七百頌般若經 (Sapta-śatikā-prajñāpāramitā)』*14④『二千五百頌般若經』*15⑤『八千頌般若經 (Aṣṭasahasrikā-prajñāpāramitā、小品般若經)』*16⑥『一万八千頌般若經』*17⑦『二万五千頌般若經 (Pañca-vimśati-sahasrikā-prajñāpāramitā、小品般若經)』*18⑧『十万頌般若經』*19 [であり、それ] が示されたのである。

『妙法蓮華 [經] (Sad-dharma-puṇḍarika-sūtra)』等が示されたことは、すぐれた (rab) [教え] の中でも最高の [經典] であって、という [その理由] もその [經典に] おいては、「一乘 (eka-yana, theg pa gcig)」が示されたことによって、不定種姓 (anyata-gotra, manges pa'i rigs can) の者達*20 をもそこから [悟りへと] 導くからである。

『大般涅槃經 (Mahā-parinirvāṇa-sūtra)』等が示されたことは、すぐれた (rab) [教え] の

中でも完全なる [經典] であって、という [その理由] もその [經典に] おいては、諸々の如来が輪廻している限り*21 おわしまして、衆生を利益なし給うことが示されている [からである]。

『大方広仏華嚴經 (Buddhāvataṃsaka-nāma-mahāvāipulya-sūtra)』が示されたことは*22、最勝にして最高*23 [の經典] なのであって、という [その理由] もその經典においては、如来が仏陀の智慧に目覚めて (abhisambuddha、現等覚)、久しからず十方に住する諸々の十地菩薩に対して、[初めて]一齊に(yuga-pad、いっぺんに) [Der ed, 301-b-1] 明確に示されるのである。

【2. MSに見る唯識派と仏語性 (buddha-vacanatva) の関係】

先述の「声聞乗たること」として、「仏説であること (仏語性、buddha-vacanatva)」を [後

*12 コンゼによれば Der ed, No. 16に相当か。もしそうであれば『金剛般若經』となる。

*13 Der ed, No. 15に相当する。

*14 Pek ed, No. 737に相当する。

*15 Der ed, No. 13に相当か。

*16 Der ed, No. 12に相当する。

*17 Der ed, No. 10に相当する。

*18 Der ed, No. 9に相当する。

*19 Der ed, No. 8に相当する。

*20 唯識説のいう五姓各別のひとつ。ちなみに五姓各別とは菩薩種姓、声聞種姓、縁覚種姓、不定種姓、無性種姓の五種である。

*21 「輪廻している限り」とは「^{ぐうしょうじさい}窮生死際 (āloka-gatam, yāval-loka-gatam : MSA)」のこと。

*22 前出の『妙法蓮華經』や『大般涅槃經』に関しては、複数形の主語として表現されていたのにもかかわらず、この『大方広仏華嚴經』だけが単数形の主語となっている。これは明らかに『華嚴經』こそが唯識派にとって特別な經典であることを物語る。

*23 声聞乗の dman (hīna) あるいは bring (madhya) に対して、ここでは菩薩乗を mchog (parama, uttara, vara) , mchog nyid (paramatva) , rab kyi mchog (vara, praṇita, adhimātratā, utkriṣṭa) , rab kyi phul (śreṣṭha) という表現でそれぞれ区別する。

述の【3】において] 否定するために、「その根拠として十種類 (daśa-sthāna) が示されたあり方の内容を [唯識派の主張する MS の所説は仏語性と] 離れているからである」と言われたこと、凡そその [声聞乗の反駁する] ことは成り立たない [指摘な] ののである*24。何となれば(1) 「声聞乗においてもアーラヤ識云々」と言われることなどによって、「知られるべきものよりどころ」が示されるからである*25。(2) 「衆生・化生 (upapāduka)*26 が存在する」と言われることなどによって、遍計所執 [性について] もまた示されているからである。このうち*27、「衆生が存在しない (無衆生)」と言われることなどによって、円成実 [性について] もまた示されているからである。「これらの法は、因を具有する」と言われることなどによって、依他起 [性について] もまた示されているからである。(3) 「知られるべきものに悟入することもまた、眼と色 (cakṣū-rūpa) 云々」と言われることなど

によって示されるからである。(4) 「[悟入という] その因と果を示すこともまた [声聞乗の中にも] あり」 [とされることは、] すなわち六波羅蜜 (pha rol tu phyin pa drug) が示されるからである。(5) 「修習を類別すること」もまた、大衆部 (mahāsaṃghika) のニカーヤ (sde pa) の中で地の類別の特質が示されるからである*28。(6)(7)(8) [さらに] 三学もまた示されるからである。(9) 「涅槃 (nirvāṇa) もまた滅尽 (kṣaya、死) や貪欲 (rāga) とかけ離れた」と言われたことなどが示されるからである。(10) 法身 (dharma-kāya) に相当する無学法 (aśaikṣa-dharma)*29 を自性とするものと、受用身 (saṃbhoga-kāya) の法輪 (受用法輪) を転じ給うたこと、そしてそれ (受用身) に生じた変化身 (nirmāṇa-kāya) が示されるために、三身 [説] (tri-kāya) がまた示されるのである。

*24 不成立の理由について、以下に括弧の番号順で MS 本文の各章が相当するように説明されている。無性釈によれば、「声聞乗には示されていない」ことが仏語性の不成立の理由になるならば、ヴァイシェシカ (勝論) の六句義なども声聞乗には説かれていないが、それらもまた大乘と言えるのかという声聞乗からの反駁があり、それに反論するための各章ごとの説明となっている (長尾本・上巻 p. 70)。

*25 単に「知られるべきものよりどころ」というだけであるならば、それは声聞乗にも説かれることである。実際、『大品』においても「アーラヤを執着する云々」との記述は時に見られることである。しかしその「すぐれた特質によって特徴づけられた教説」は、大乘の立場においてのみ説かれた十種の道理を指す、という見解である。長尾本・上巻、pp. 76-77参照。

*26 rdzus te skye すなわち upapāduka (化生) とは四生のひとつ。四生とは胎生、卵生、湿生、化生である。他より生じることなく自ずから化成せるものであり、何も無いところから忽然と出生する存在。天人や地獄の衆生などがこれに相当する。

*27 「このうち ('di las)」とは、①小乗というこの箇所、②現世というこの場所の二つの意味が考えられるが、おそらく前者の経典の箇所を指すのであろう。

*28 地の差別、類別は『大智度論』や『般若経』などに十地の展開として見られるが、その他の大衆部所持の典籍の中に十地の用例があるとされているので、検索の必要があるがここでは未確認。

【3. 声聞乗と仏語性 (buddha-vacanatva) の関係】

[以上の十種の論拠に見るように、唯識派の主張するMSの所説が仏語性 (buddha-vacanatva) において成立するとVGPVの筆者が]考えるのは何故なのかというならば、「これによって ('di ji ltar na 'dis, katham tena, 如何にして)*³⁰」と[MS序・第4節冒頭に]言われることなどが説かれた[ことに基づく]のである。何とならば、「これら十種の道理云々」と[同じMS序・第4節にも]説かれる、[正に]このことによって、[大乘は仏語性の]論拠を成立せしめるのである*³¹。[何故かと言うならば、この]十のあり方(十種の道理)が完全に説かれていることを[声聞乗は]離れている(欠如している)からである*³²。というのも声聞乗においては、(1)「知られるべきよりどころ」もまた[MSに言われるようには](イ)因を類別(bheda, viśeṣa)することや、(ロ)行(samprayoga)を類別することや、(ハ)把握対象

(ālambaṇa)の説示や、(ニ)[アーラヤ識としての]薫習(vāsanā)のよりどころなるものという[これら]4点からの区別によって[は、声聞乗においては所知依に関して]示されてはいないのである。(2-1)「遍計所執[性]」[について]もまた色等の類別を[声聞乗においては]示されてはおらず、以下も同様に、(2-2)「円成実[性]」[について]も法無我という特質を[示さず]、(2-3)「依他起[性]」[について]のそのこと自体(dngos bo)*³³も、八識の集まり(和合)*³⁴という特質を[それぞれ声聞乗では]明瞭に開示してはいないのである*³⁵。(3)「知られるべきものに悟入すること」もまた、[大乘に]示されるごときの遍計所執[性]等の中に悟入する特質としては[声聞乗には]示されてはいないのである。それ(「知られるべきものに悟入すること」)が無いのだから、故に三輪が清浄(tri-maṇḍala-pariśuddha)*³⁶となる(4)「[六]波羅蜜」もまた明らかに開示されてはおらず、また一方で[大乘の菩薩戒によっ

*29 阿羅漢果にあるダルマで、非学非無学に相当するもの。ed. by V. V. Gokhale, The Text of the Abhidharakośakārikā of Vasubhandhu, Journal of the Bombay Branch, Royal Asiatic Society, N. S. , vol. 22, 1946, IV, p. 32, 64, 91

*30 「これによって」と訳すと、MS序の第3節末の箇所に対応すると考えられるが、「如何にして」と訳せば第4節冒頭の句に対応する。いずれ明確ではないが、次の'di ltarを「何とならば」と訳せば意味が通りやすくなるので、おそらく第4節の句と見るのが適切であろう。

*31 つまり大乘では「十種の道理」が説かれるので、仏語性が成立するという根拠として示される。

*32 一方の声聞乗では「十種の道理」が説かれないので、仏語性が成立しないという根拠として示される。

*33 dngos bo というだけでは vastu か bhāva かの判定は困難である。漢訳にでも見出されれば限定も可能になるのだが、ここではひとまず「自体」と訳した。ただ Drang nge legs bshad snying po にも見られるように vastu が意識の内部まで示すとすれば、それは唯識派では八識が vastu ということになるだろう。

*34 rnam par shes pa brgyad kyi tshigs…「八識の集まり(和合)」とは第六識までに加え、第七末那識と第八アーラヤ識を体系化した唯識説の見解を指す。

*35 大乘の特質としては明らかにされていない、という意味。

て初めて示されるがごとき] 饒益有情戒 (sattvārthakriyā-sīla)^{*37} などまた[声聞乗においては] 示されていないのである。凡そ何であれ、[確かに] 大衆部 (mahāsaṅghika) において [も] (5) 「地の類別」が示されたのであるが、そういったものはまた、その [大衆部の] 立場としての内部に所属するもの [に過ぎないの] である^{*38}。(6) 「増上戒学」もまた [声聞乗にも確かに示されたが、] 饒益有情戒の特質を明らかにしてはいない。(7) 「増上心 [学]」もまた大乘を特質として [それが] よく現れている三昧 (大乘光明三昧)^{*39} 等の区別を [声聞乗では明らかにしておらず]、そして (8) 「増上慧 [学]」もまた、[法無我と人無我の] 二無我を理解することの区別を [声聞乗では明らかにしておらず]、そして (9) 「無住処涅槃 (a-pratiṣṭhita-nirvāṇa)」もまた、[後に] 説明することになるといったごときものを [声聞乗では明ら

かにしておらず]、(10) 「三身 (tri-kāya)」もまた、[大乘において] 承認されるがごときものを [それぞれ声聞乗では] 明らかにしてはいないのである。[以上の十種の論拠によって声聞乗と仏語性 (buddha-vacanatva) の欠如が明らかとなったので、MS 本文・序・第 4 節にも] 「大菩提を成就して (byang chub chen po kun du sgrub par byed pa ste)」と [以下の VGPV に] 言われることなどによって、自己の立場 (唯識派の主張) を成立させるのである^{*40}。(続)

4. VGPV 藏文

[from Der. ed, No. 4052, Ri, 301-a-4, Pek. ed, No. 5553, Li, 363-a-2]

【1】

rnam pa brgyad ni ① shes rab kyi pha rol tu phyin pa sum brgya pa tang ② rnga ba

*36 'khor gsum rnam dag (三輪清淨) の三輪は通常、①施者・施物・受施者②因 (理由)・違 (相違)・遍 (周延) ③身・語・意の 3 ケースがあり得るが、ここでは①である。勿論、布施を筆頭におく六波羅蜜が言及されているからである。これは大乘の菩薩が第七遠行地の時に証得し、対境と能作と所作の三者がすべて無自性であることが明かされることと定義される。『藏漢大辞典』上・ed by, F. Edgerton, Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary, Rinsen Book Co, Vol. 2, 1985, p. 258

*37 唐突に「饒益有情戒」が現れているが、おそらく饒益有情戒ほど大事な戒にもかかわらず、声聞乗ではそれさえ示されていないではないか、という反駁から用いていると思われるので、「大乘の菩薩戒によって初めて示されるがごとき」と前文に補足した。

*38 「確かに大衆部では…示されたが、その立場の内部の所属するものに過ぎない」と訳したのは、唯識派と雖も「菩薩地戒品」は重視せざるを得なかったため、その苦しい反論の意図を読み込んだためにこのように表現した。

*39 「大乘光明三昧」は mahāyāna-āloka-samādhi というよりも、mahāparibhāsa かもしくは mahāyānābhāsa であろうか。大乘が三昧をより重視しつつある傾向が「心学」において現れている。つまり智慧とは類別された心として、samādhi は限りなく citta と結びつくことによって、心学が慧学を区別して排除する定中心の立場が開陳されている。故に「増上心学もまた大乘を特質として、それが最もよく現れている三昧」と VGPV は説くのである。関連して MS VII. 3 参照。

rgya pa dang ③ bdun brgya pa dang ④ nyis stong rnga brgya pa dang ⑤ brgyad stong pa dang ⑥ khri brgyad stong pa dang ⑦ nyi khri rnga stong pa dang ⑧ 'bum pa bstan pa yin no. dam pa'i chos pa d ma dkar po la sogs pa bstan pa ni rab kyi mchog yin te. 'di rtar de las ni theg pa gcig bstan pas ma nges pa'i rigs can rnam kyang de las 'dren to. mya ngan las 'das pa chen po'i mdo la sogs pa bstan pa ni rab kyi phul yin te. 'di ltar de las ni de bzhin gshags pa rnam 'khor ba ji srid par bzhugs shing sems can gyi don mdzad par bston to. sangs rgyas phal po che 'i mdo bstan pa ni rab kyi phul gyi mchog yin te. 'di ltar mdo de ni de bzhin gshegs pa mngon par rdzogs par sangs rgyas nas ring po ma lon par phogs bcu na gnas pa'i byang chub sems dpa' sa bcu'i dbang phyug rnam la lan cig [Der ed, 301-b-1] rab tu bstan to.

【2】

gang du nyan thos kyi theg pa chen po nyid du sangs rgyas kyi gsung yin pa nyid dgag pa' i phyir gtan tshigs rnam pa bcu bstan pa dang bral pa'i phyir zhes bya ba de ni mgrub ste. (1)nyan thos kyi theg pa las kyang^{*41} kun du dga' ba zhes bya ba la sogs pas shes bya'i gnas bstan pa'i phyir ro. (2)sems can rdzus te skye ba yod do zhes bya ba la sogs pas kun brtags pa yang bstan pa'i phyir ro. 'di las sems can med do zhes bya ba la sogs pas

yongs su grub pa yang bstan pa'i phyir ro. chos 'di dag ni rgyu dang bcas zhes bya ba la sogs pas gzhen gyi dbang yang bstan pa' iphyir ro. (3)shes bya la 'jung pa yang mi gang gzugs la sogs pa zhes bya ba la sogs pas bstan pa'i phyir ro. (4)de'i rgyu dang 'dras bu bstan pa yang yod de. pha rol tu phyin pa drug bstan pa'i phyir ro. (5)bsgom pa rab tu dbye ba yang dge 'dun phal chen sde'i sde pa las sa'i rnam par dbye ba'i mtshan nyid bstan pa'i phyir ro. (6)(7)(8)bslab ba gsum yang bstan pa'i phyir ro. (9)mya ngan las 'das pa yang zad pa dang 'dod chags dang bral ba zhes bya ba la sogs pas bstan pa'i pyir ro. (10)chos kyi sku mi slob pa'i chos kyi ngo bo nyid dang longs sbyod rdzogs pa'i sku chos kyi 'khor lo bskor par mdzad pa dang de skye ba sprul pa'i sku bstan pa'i phyir sku gsum yang bstan to.

【3】

snyam pa'i^{*42} bsam pa 'di ji ltar na 'dis zhes bya ba la sogs pa smos so. 'di ltar gnas bcu po 'di dag ces bya ba la sogs pa 'dis ni gtan tshigs sgrub par byed do.rnam pa bcu rdzogs par^{*43} bstan pa dang bral pa'i phyir ro zhes gtan tshigs ston pa'i phyir ro. 'di lnyar nyam thos kyi theg pa las ni (1)shes bya'i [Pek ed.363 -a-1] gnas kyang (イ)rgyu'i bye brag dang (ロ) mtshungs par ldan pa'i^{*44} bye brag^{*45} dang (ハ)bag chags kyi rten nyid la sogs pa'

*40 長尾本・上巻、p. 70, l. 12によれば、この「大菩提を成就する」を「大菩提を引き起こす」として mahābodhi-sampādaka と還元している。つまり声聞乗では同様の説示が見られても大菩提を引き起こすことがないので仏語性を欠如していると見るのである。

*41 "kun gzhi la" in Pek ed.

*42 snyam pa…感得する、考えるなどという意味の自動詞。ここの和訳には問題も残るが、ひとまず直訳に徹した。

i dbye bas ma bstan no. (2-1)kun brtags pa yang gzugs la sogs pa'i bye brag dang (2-2) yongs su brub pa yang chos la bdag med pa' i mtshan nyid dang (2-3)gzhan gyi dbang gi dngos po yang rnam par shes pa brgyad kyi tshigs kyi mtshin nyid rab tu rnam par ma phye'o.*46 (3)shes bya la 'jug pa yang ji skad bstan pa'i kun brtags pa la sogs pa la [Der ed.302-a-1] 'jug pa'i mtshan nyid ma bstan to. de med 'khor gsum rnam par dag pa'i*47 (4)pha rol tu phyin pa dag kyang rnam par ma phye la sems can gyi don bya ba'i tshul khrims*48 la sogs pa yang ma bstan to. dge 'dun phal chen sde rnams*49 la (5)sa'i dbye ba bstan pa gang yin pa te. yang phyogs kyi khongs su gtogs pa yin no. (6)lhag pa'i tshul khrims kyi bslab pa yang sems can gyi don bya ba'i tshul khrims kyi mtshan nyid rnam par ma phye'o. (7)lhag pa'i sems kyang theg pa chen po rab tu snang ba'i mtshan nyid kyi ting nge 'dzin*50 la sogs pa'i dbye ba dang (8)

lhag pa'i shes rab kyang bdag med pa gnyi ga rtogs pa'i dbye ba dang (9)mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa*51 yang ji skad 'chad par 'gyur ba dang (10)sku gsum*52 yang ji ltar bzhed pa*53 bzhin rnam par ma phye'o. byang chub chen po kun du sgrub par byed pa ste*54 zhes bya ba la sogs pas ni rang gi phyogs sgrub par byed do. [Der ed. 302-a-4]

*43 rdzogs pa…成就する、完成する、円成するなどという意味の自動詞。仏語性が成立していると同時に、十種の道理をすべてにわたり完璧に説いてしまっているという意味として和訳した。

*44 mtshungs par ldan pa…samprayoga or samprayukta

*45 bye brag…viśeṣa (vt)

*46 phye pa…顕了する、開示するなどという意味の他動詞。大乘としての特質を有するものとして明らかにされているとは言えない、とのこと。

*47 'khor gsum rnam dag…tri-maṇḍala-pariśuddha

*48 sems can gyi don bya ba'i tshul khrims…sattvārthakriya-śīla

*49 dge 'dun phal chen sde rnams…mahāsaṅghika

*50 theg pa chen po rab tu snang ba'i mtshan nyid kyi ting nge 'dzin…mahāparibhāsa

*51 mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa…a-pratiṣṭhita-nirvāṇa

*52 sku gsum…tri-kāya

*53 bzhed pa…① kanta (vt)：所喜。好まれるもの。② abhipreta (indeclinable)：意味するもの。認めること。承認されるもの。

*54 byang chub chen po kun du sgrub par byed pa ste…mahābodhi-saṃpādaka